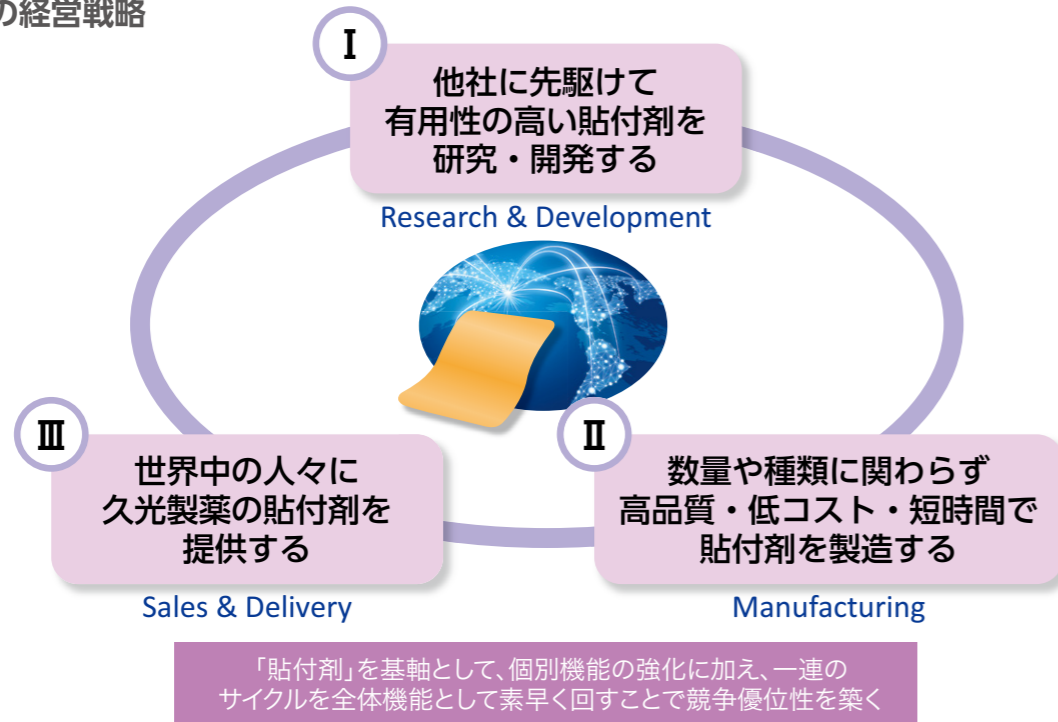


第6期中期経営方針

2017年4月、当社は第6期中期経営方針を発表しました。国内外の医薬事業に関わる社会環境の変化やSDGsなどにみられるグローバルな健康課題への関心、さらに、国内でのGPIFの取り組みなど投資環境の変化や非財務側面の重要性の高まりなど、第5期中期経営方針の前提条件が大きく変わってきました。当社は、久光製薬グループが推進すべき取り組みの変化を考慮し、第6期中期経営方針の策定に至りました。

本方針では、「営業活動」「研究開発活動」「生産活動」「その他の活動」という4つの領域で克服すべき具体的な課題を掲げています。中でも「その他の活動」では、企業としてのあるべき基盤をさらにステップアップするため、これまでCSR活動として取り組んできたことをより明確に示しました。

久光製薬の経営戦略



第6期中期経営方針の実行プラン



第三者意見



慶應義塾大学大学院
ビジネススクール教授
小林 喜一郎

本年は激動の年でありました。新型コロナウイルス感染症は驚くほどのスピードで世界に拡散し、人類の日常生活や企業の経済活動に大きな負の影響を与えており、いまだに終息の兆しが見えておりません。世界を見渡せば、コロナは米中両国の覇権争いにも大きな影を落としております。ワクチンの開発競争がその象徴的な事例であり、どちらの国が先に開発して供給することで世界に影響力を与えるかなど、政治的駆け引きのカードとなってしまっています。急速に経済・医療の政治化現象が起こっている状況とも言えるでしょう。

このような大転換期では、企業もリーダーも腰を据えて未来を構想し、新たな社会を築いていくという大きな使命が課せられているといっても過言ではありません。中富社長も冒頭、久光がコロナ後の新しい生活を作っていく先導者となるべく、製品・サービスを提供し、従業員の就業環境を整備するなど、リーダーとしてさらなるESGの進化に向けた施策に取り組む決意を語っておられ、誠に心強い限りです。変化は危機であると同時にチャンスでもあります。今後も「久光らしさ」をモットーにESGに立脚した独自性の高い施策をお考えいただき、ESG経営に邁進していかれることを期待しております。

この1年の久光のESG活動の大きな取り組みの成果は、やはり何といても清原工業団地スマートエネルギー事業が本格始動したことでしょう。久光はカルビー、キヤノンとともに、東京ガスグループと連携することで、栃木県宇都宮市の清原工業団地内で、環境にやさしいエネルギー供給システムを複数事業所に供給することに成功しました。実際の環境改善の数字を見ても、稼働開始からの約半年間で、CO₂削減は前年比10.4%減(年率換算約20%)となっており、ESGのE(環境保護)面で大きな飛躍をされました。宇都宮工場は久光の東日本及び海外の供給拠点という巨大施設である為その環境改善の波及効果は大きく、環境保護実績として高く評価することができると見えます。労働安全衛生に関し取得したISO45001の基準とのさらなる相乗効果を期待したいところです。

また新型コロナウイルスという未曾有の危機に対して、ESG推進を担われる方々のご意見を伺わせていただくと、従業員への対応、顧客先への配慮、また世間一般への対応など、あらゆるステークホルダーに向け久光としてできる最大限のことをしているように見えます。リモートワークはもとより、連

絡を切らすことが許されない医療従事者への頻繁なWEBを介した情報提供活動の実施、生産部門でのウイルス侵入防止策の徹底、早期原材料確保など、まさに各部署が総力を挙げて社会的な危機に対応しているという姿勢が見られます。これらはESGのS要素についての、実践的な取り組みといえるのでしょうか。

さらにESGのGについては、ますます経営の透明性と情報開示の推進が求められておりますが、新たに社外取締役2名を外部から迎え入れたと伺っており、さらなるガバナンスの強化に向けた姿勢が鮮明になったと評価できます。

報告書の久光におけるCSRの企業全体での位置づけを説明する箇所では、原材料調達から開発・生産さらには営業までの上流から下流に至る一連の企業活動、即ちバリューチェーンに沿った課題が列挙され(p.14)、重点取り組みテーマを抽出されています。ここは本年度になり新たに追加された記述であります。バリューチェーンは様々なステークホルダーや社内各部門との活動の流れのみでなくその結節点を示すもので、バリューチェーンの要素毎に具体的に、例えば「児童労働の問題」「知的財産権」「環境配慮型製品開発」「労働環境衛生」「CO₂排出量削減」「コンプライアンス徹底」「商品使用後の容器包装紙リサイクル」等、多くの取り組むべき項目が課題として認識・整理されていることは非常に良いことです。バリューチェーン上の活動の生産性を再定義し改善することは、直接的にCSRやESGに効果をもたらします(脚注1)。これらの課題を各担当部署がさらに積極的に取り組まれること、さらに取り組み全課題における成果を定量化し達成プロセス経過を見える化していくことが徹底されれば、さらに説得力が増すのではないかと考えます。

久光のCSR推進での特筆に値する特徴及び成果として、EHS(Environment, Health, and Safety)が挙げられますが、この取り組みはかなり進んでおられます。これはESGの特にEとSの項目に大いに関連した取り組みともいえます。毎年の目標に対する達成結果、経営陣によるレビュー、しっかりした組織体制の維持、がEHSマネジメントシステムとして企図されており、環境と労働安全性への取り組みの徹底度が良く出ている証拠であると思います。ISO認証取得によりこの組織全体としての取り組みに拍車がかかるであろうことを考えますと、大きな成果達成が今後も続きそうで、大変期待しております。

本年は新型コロナウイルスのパンデミックに始まり、世界全体が安全・健康について再認識させられる年でありましたが、この困難な環境にあっても一貫してCSR、ESG、EHS、に取り組まれている久光のぶれない姿勢、これは高く評価することができ、ぜひこの姿勢を続けていっていただくことを切に願います。

脚注(1)ハーバード・ビジネス・スクールのマイケル・ポーター教授は、氏の共著論文「共通価値の戦略」(ハーバード・ビジネス・レビュー、2011年6月号、p.8-31、ダイヤモンド社)の中で、サステイナブルな成長を実現するため、また経済価値と企業価値を同時実現するため、「共通価値の戦略(CSV)」を提唱した。その中でポーター教授はその実現の方法として、1.製品と市場を見直すこと、2.バリューチェーンの生産性を再定義すること、3.地域社会にクラスターを形成すること、の3点を挙げている。この3つの方策に鑑みると、久光は世界の人にQOLを提供し貼付剤という視点から新しい治療方法をまだその習慣の無い世界に広めているという点で1.の製品と市場の見直しを行っている。また今回の報告書にもあるバリューチェーン上の要素毎の課題を抽出し取り組んでいるという点で項目2を推進しようとしている。さらには久光・キヤノン・カルビーと一緒に東京ガスエンジニアリングソリューションズと組み、清原工業団地でスマートエネルギー事業を始めたことは、3.の地域クラスターを作っていることと同義で無いだろうか。まさに出来ることはすべてやる、すべての方向から積極的にCSR、ESGに取り組んでいることの証と考えられる。